

「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」に係る研修会 (その4)を実施しました。

新たな学校教育準備
プログラム推進事業
通信 No.5

平成30年10月16日
教育指導課教育課程係

『主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善』

東京学芸大学教育学部 准教授 高橋 純 氏

「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」の青葉区の拠点校として実践に取り組んでいる仙台市立北六番丁小学校（伊藤敏子 校長先生）において、平成30年10月2日（火）に研修会が行われました。東京学芸大学教育学部准教授の高橋純氏をお招きし、北六番丁小学校の研究主題「主体性をもってかわり合い、互いに尊重し合う子どもの育成」に基づいた社会科（第5学年）の授業を公開するとともに、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」について講話がありました。開催校の先生方他、近隣の小・中学校の先生方、また東北学院大学文学部教授 佐藤正寿氏や仙台市教育センター菊池達也指導主事等も参加する中、充実した研修会となりました。

高橋先生からは、公開授業への助言を含め、その子の生涯にわたって役に立つかという視点を持つことの重要性や学習するプロセスをいかに教えていくかということが問われていること、探究的な学習の過程（シンキング・サイクル）は、総合的な学習の時間だけのものではないこと等、たくさんの具体的な事例とともに、新学習指導要領の目指す学びと主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善のポイントについてお話しいただきました。高橋先生の講話の概要は次のとおりです。

- ・ 「教育技術」（指示、発問、板書等）… 即効性が高いが、これだけではいけない
「教育方法」（主体的・対話的で深い学びの授業）… 即効性は高くないが、これからの子供たちを育成するために必要なもの
- ・ 「主体的・対話的で深い学び」は手段であり、目的は「資質・能力の三つの柱」を身に付けること
「主体的・対話的で深い学び」が繰り返されることで、質的な高まりとなる
〈資質・能力の三つの柱の質的高まり〉
 - ◎ 「知識・技能」の習得 ⇒ 生きて働く「知識・技能」の習得
 - ◎ 「思考力・判断力・表現力等」の育成 ⇒ 未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成
 - ◎ 「学びに向かう力・人間性等」の涵養 ⇒ 学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養
- ・ 育成を目指す資質・能力の三つの柱の高まりには時間の幅がある
 - ◎ 「知識・技能」の習得→「授業場面」で身に付ける
 - ◎ 「思考力・判断力・表現力」の育成→「学習過程」で身に付ける
（「授業場面」より長い時間を要する）
 - ◎ 「学びに向かう人間性等」の涵養→「学校・地域を含め日頃から」身に付ける
- ◇ 「学習過程」がとても大事である。「学習過程」をよりよいものにするために、主体的・対話的で深い学びがあり、見方・考え方があり、ICTがあり、その他様々なものがある
- ・ 「その子の生涯にわたって役に立つか？」という視点を持つことが授業においても日常生活においても大切である

教科等の特質を踏まえ、具体的な学習内容や児童の状況等に応じて、……学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすることが求められている。

【学習指導要領解説 総則編 第3節 教育課程の実施と学習評価】

- ・ 「情報の収集」→「整理・分析」→「まとめ・表現」といった探究的な学習の過程（シンキング・サイクル）は、総合的な学習の時間だけのものではない。このプロセスを踏むことが、様々な問題解決につながり、深い学びとなる

※ 「整理・分析」をしっかりとやるのが難しい……

→「整理・分析」をする際の考え方は「比較すること」

◇「比較する」とは、「違うこと」と「同じこと」を見付けること
(三つ以上あるときは二つずつ比べる)



- ・ 「学習過程」（学習するプロセス）をいかに教えていくかが問われている。「学習過程」を身に付けた子は、生涯にわたって能動的に活躍しやすい子になる
- ・ 「先生がいなくなっても学べる子」をどう育てるのか、ということが問われている
- ・ 新学習指導要領等の改訂のポイントとしてキーとなる言葉
→ 知識・理解の「質」
思考力の高い人＝知識・理解の質が高い人
- ・ 知識が複数の点で独立している状態から、言語活動や体験活動を通し、主体的・対話的で深い学びが繰り返行われることにより、知識の点と点が線で結ばれ、繰り返してその線が太くなり、更に繰り返されることで、知識が構造化され、感覚的に分かることにつながる
- ・ 繰り返し行う場は学校教育だけではない。だからこそ生涯にわたって能動的に学び続ける力が大切
- ・ 資質・能力は相互に関連しており、習得された知識・技能が思考・判断・表現において活用されるという一方通行の関係ではなく、思考・判断・表現を経て知識・技能が生きて働くものとして習得されたり、思考・判断・表現の中で知識・技能が更新されたりすることを含む

★ 受講者の声 ★

- ・ 「課題の設定→情報収集→整理・分析→まとめ・表現」のスパイラルが、どの場面でも大切であることを、具体例を聞くことや講話の中で実際にやってみることを通して学ぶことができました。「整理・分析」が自分の授業や思考にいかに足りなかったかを感じました。
- ・ 子供たちに教えるべきことが、知識だけでなく、考える方法も必要だという話を聞き、なるほどと思いました。また『比べる』とはどのような方法で行うべきものなのかということについても教えていただき、大変勉強になりました。
- ・ 生涯にわたって学び続けられる力を身に付けていくには、「学び方」や「プロセス」を教えていくことが必要であり、長い時間を掛けて実現するものだということが分かりました。「目標と手段」「時間幅の見通しを持つこと」も大切だと思いました。
- ・ 「知識の理解の質の高さ」が、思考力の高さに結び付くということを学んだので、普段の授業でも、理解したこと、考えたことを自分の言葉で表現できるように、言語活動の場を増やしていく努力をしたいと思います。
- ・ 話し合わせることを目的にするのではなく、対話を通して知識を確認したり、技能を確かにしたりする方法もあると知り、実践してみたいと思いました。
- ・ 今回の研修後、先生方が、『授業改善』や『学習過程の改善』について話を弾ませています。学んだことを日々の授業デザインやカリキュラム・マネジメントに生かせるよう、例えば「教師の“整理・分析”模擬授業研修」や「授業〈単元〉デザイン振り返りシート」等、工夫して実践してみたいと思います。

